

障害者殺傷事件から1年

⑤

意味なき命はない

相模原市の障害者殺傷事件の現場となった施設の再生に向けた、議論がすすんでいきます。障害者の暮らしの場はどんなものが必要なのでしょう。

「緊急での受け入れ先はなかなかみつからないうえ、てんかんなど困難を抱えた人はますます受け入れを渋られます。Aさんの場合、綱渡りでどうにか過ごしてきました」。『老障介護』の深刻な実態を話すのは、埼玉県内の相談支援専門員の田中浩二さん(仮名)です。「障害のある人は毎年増えています。3年前までは緊急受け入れ先をみつめることができたけど、今

緊急では難しい

知的障害と自閉症、てんかんの持病がある40代Aさんは今年、1カ月間で埼玉県内の施設10カ所を転々としていました。自宅でAさんを介護していた70代の母親が入院してし

多様な暮らしの場

障害者の暮らしの場について語り合う家族ら



は困難を極めています」

40〜50代の障害者が、高齢の親と暮らすケースは少なくありません。多くは、障害のある人一人ひとりに合う暮らし

しの場の整備が不十分なことが原因です。

20代のBさんは父親の死後、兄と2人で暮らしていましたが、兄が亡くなってから不安定になったBさんは、たびたび問題を起していたといいます。ある時、近所の店でトラブルを起こしてしまい、警察沙汰になりました。

一度は自身で弟を支えようと考えていた兄は限界に。翌日から緊急で施設短期入所しました。

人権どうみるか

田中さんは、親に突然変化が起きて緊急で入所が必要になる事態を避けるためにも、10代のうちから将来を見据えて暮らしの場を検討していくことが重要だと話します。

また、「入所施設とグループホームのどちらがふさわしいかは、障害の重症は関係な

い。どういう暮らしの場があれば豊かに生活できるのかを考えることが求められます」と指摘します。

父親からの虐待があり児童養護施設で暮らすCさんは、障害児学校高等学校に通いいます。知的障害の程度は軽いかこそ、精神的な傷が深いと田中さん。

「Cさんのような人の場合、施設長や事務、看護師、運転手などいろんなおとなが入所施設で生活を支え、精神面が安定してからグループホームでもいいでしょう」

障害のある人の暮らしの場をめぐっては、「グループホームや入所施設など多様な資源が必要です。障害のある人の人権をどうとらえるのかという視点で、生活の中身を組み立てることが重要です」と田中さんは強調します。

一人ひとりに合わせ